



岩内町郷土館 令和5年度 第三回企画展 ボーイスカウト日本連盟100周年+1記念

岩内少年団下田豊松の功績

1923(大正12)年7月14日 岩内港に入港した軍艦「春日」にて 少年団員乗船見学の記念写真。中央が団長下田豊松

「市川さんあなたね、岩内に来られて
いま財政の整理にあたられている、そ
して立派な岩内が仮にできたとしたら、
その財産を道楽むすこ
に渡しますか、それと
も感心な子供に渡しま
すか」と聞いた。

まさか道樂むすこに渡すといえないで
しょう。「**立派な子供をつ**
くるための少年団です。
学校の教育だって悪い子供をつくるた
めにあるのではないでしょう」

(大正時代、岩内町の貧困財政再建のため道府
から派遣された市川助役が、岩内少年団設立に
反対意見述べたのにに対し、豊松が返した言葉
『羽ばたけ北海道 北海道回想録2』)

開催期間:令和5年(2023) 9月9日(土) ~ 11月23日(木祝)



展示状況(企画室南側)

ご挨拶

「郷土館所蔵の下田豊松資料を見たい」という連絡が、長野のスカウティング研究センター中島先生より入ったのが、コロナ禍のはじまる前年2019年のことでした。2022年に「日本ボーイスカウト連盟」が設立100周年を迎えるにあたり、1920(大正9)年にロンドンで開催された「第一回ボーイスカウト国際ジャンボリー」に参加した下田豊松の功績を、改めて取り上げたいとのことでした。今回の企画展とシンポジウムは、3年の歳月をおいて、ようやく本年度の開催となりました。

下田豊松の功績を一つ一つ辿るとき、まず感じられるのはその旺盛な行動力です。ボーイスカウトの発祥地ロンドンへの旅へは、すべての費用を自費で準備し、当時は二ヶ月を要する初の海外遠征。そして、創立者ベーデン・パウエル卿と対面し、彼が日本精神の武士道を理解、深く敬意を抱いていることを知り、お互いに信頼関係を築きます。また地元岩内、北海道の少年団のみならず、全国の少年団組織の創設のため各地で講演し、設立のための署名を集めています。政財界、文化人、軍閥…とにかく驚くような範囲の広さで、人脉ネットワークを築いていました。この北海道辺境岩内にあって、ネットもない時代にあって、それを実行したのが下田豊松という人なのです。

その人脉をもとに、豊松は北海道の農業、酪農業の発展のため、あらゆる手を尽くします。その一つが、弟である下田喜久三の「国产初」のアスパラガス栽培。そして二人の安達青年が手掛けた、デンマーク式酪農業の実践。いずれにしろ豊松は、自分が手掛けるのではなく、若い世代に託し、自分の持つ財産、手段、人脉を駆使し「陰の立役者」として行動します。戦後は、引揚者の支援活動にも奔走します。晩年豊松は、「家に迷惑をかけ放しだった」と語ります。自分や家族の利は後回しにして、社会、公益のために行動した生涯でした。

そして豊松は、敵も多く作りました。それは嘘や建前、忖度など、人間社会が生みだす歪(ひずみ)を嫌い、真に正しく生きたからこそ生じた対立です。自分の役割を、正直に精一杯果たすこと。ボーイスカウト精神は、青少年を真人間に育成しようとした豊松が、理想としたものでした。それは自身が幼少の頃に受けた、先生たちへの恩義の心、また、十六歳で夭折した次弟、成吉の高い志が、豊松の中に強く刻まれていたからなのかもしれません。後志に、下田豊松あり。そのアクティビスト(活動家)としての力強いお人柄に、ぜひ触れていただきたいと思います。

最後にこの企画展開催にあたり、ご協力をいただきました俱知安風土館、佐藤英行氏、豊松曾孫の井原由加子さん、スカウティング研究センターの皆様に心より御礼申し上げます。

2023(令和5)年9月9日
岩内町郷土館



郷土館入口の企画展横断幕



下田豊松の考案した徽章と「綱領宣誓」



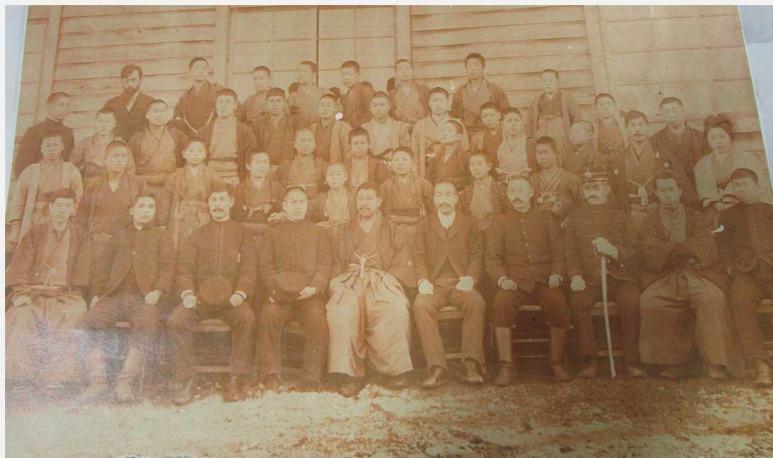
少年団組織創設のため集めた各界名士の署名



1922(大正11)年皇太子殿下奉迎北海道ジャンボリー記念写真アルバム



戦後に新しく創設された、現在の「ボーイスカウト日本連盟」の「グッズ



1902(明治35)年岩内尋常高等小学校第十期卒業記念

下田豊松は、明治二十年、岩内町御鉢内の下田家の長男として生まれた。生来病弱で、小学校は休みがちで、進級も危ぶまれるほどだったが、担任の久吉正輝先生の励ましと助言により、学業をなし、卒業後は函館商業高校へと進学する。進学後も、多くの教育者の恩恵を受ける。豊松は、この岩内の久吉恩師からの手紙を、終生大切にしていたという。

下田豊松 生い立ちと ②下田商店



豊松 十五歳



1917(大正6)年頃 下田四兄弟
後列に喜久三と豊松 前列に秀雄と久雄

函館商業高校を卒業後、豊松は「一年志願兵(幹部候補生。高成績や家柄により、優遇された兵役)」として、歩兵第二十七連隊(旭川)に入営。

1908(明治41)年、除隊。岩内へ戻り、家業の岩内下田商店の経営に専念する。父下田仁三郎の代から、②下田商店は、米穀、生活雑貨の販売や、農家の肥料販売、運送業など、多角的な経営で、岩内での地盤を固めていた。

弟の喜久三が、薬科大学を卒業して帰岩すると、岩内本店の事業を喜久三に任せ、豊松は②下田俱知安支店の開設のため、大正6年俱知安町へと移住する。

また、軍人としての豊松は少尉に任官し、大正7年には中尉に昇進。在郷軍人会の分会長に任せられる。

事業のかたわら、豊松は青少年の育成運動として「少年団」の創設、運営に熱心に取り組んだ。英國発祥のボーイスカウト運動に触れ、その「第一回世界ジャンボリー」に参加するため、自費で旅費を賄って、渡欧した。

志高き夭折の弟 下田成吉のこと

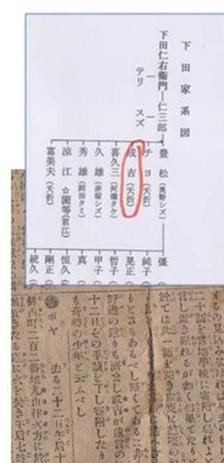
豊松が、大切に保管していた資料の中に、明治時代の「岩内新報」の切抜記事がある。内容は、喜久三との間にいた弟、成吉の事で、わずか十六歳で夭折した。

「●感心なる少年一当町鷹台に住む下田成吉(十六)といふは、優等生なりしが、病に襲われ薬石の効無く去る廿日に死去した。」

「彼は、死の間際に、両親を枕元へ招き、余は当地在学中は、ひとかたならぬ諸先生方の厚意を受け、中学まで入校進学できた。しかし学半ばで、病に倒れ、到底治癒の見込みもなければ、余が死去の後は余の貯金を全て当地学校へ寄付してくれ、と遺言した。」「扱ても奇特の少年といふべし」

豊松20歳、喜久三12歳の時である。後に彼らは少年団運動や、婦人実務学寮の創設など、青少年教育の大切さを見出し、実践することとなる。

二人の心には、若くして亡くなったこの弟(兄)の志が、生きていたのではないかと思われる。



「人の運動（少年団運動）」 より始まり 「地の運動（酪農開拓）」へ



光照寺北側（現八幡通り）を行進する岩内少年団



現大浜海岸付近。整列する岩内少年団



軍艦「春日」乗船見学



海拓少年団発団式



少年団徽章。三種の神器を模して作成

日本健児団主催 皇太子殿下奉迎 北海道ジャンボリー

1922(大正11)年7月13～15日、札幌月寒の陸軍第25連隊において、道内各地の少年団が集結し「日本健児団主催北海道ジャンボリー」が開催された。この時、当時の皇太子殿下(後の昭和天皇)のご親閲を賜った。



3 札幌駅前に集合した少年団



組体操の様子



(念記ーリポンヤジ健主団兒健本日) 迎奉閲親御下殿子太皇

皇太子殿下(のちの昭和天皇)ご親閲奉迎

下田豊松、初の渡欧 第一回ボーイスカウト世界ジャンボリー

1920(大正9)年、豊松は、世界中に広まっているボーイスカウト運動の世界大会が、発祥の地ロンドンにおいて、初めて開催されることを知り、東京少年団の小柴博とともに、日本代表として参加するために、英国へと出立した。

当時の船旅は、日本から英国まで二ヶ月の日数を要し、旅費も現在の約数百万円を費やしたが、豊松はその経費のすべてを自費で賄った。

帰国後、豊松は日本の少年団が国際的な立場を確かににする必要性を痛感。政財界の著名人や文化人などから賛同の署名を集め、国際事務局に登録するために奔走した。

1921(大正10)年、「Boy Scout of Japan(日本健児団)」として、自らが総長、事務局となり、国際登録を果たす。少年団要綱、規則、標語、徽章なども、下田豊松の考案によって作成された。



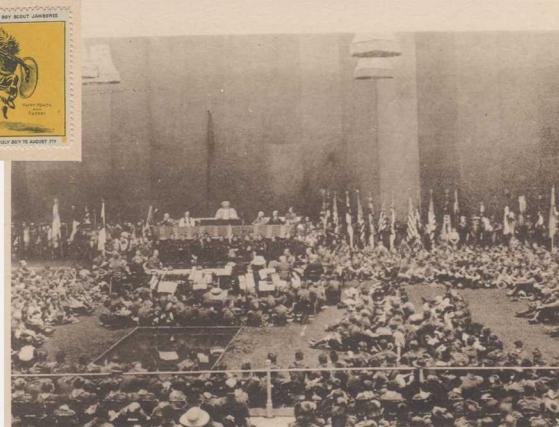
豊松(左)と小柴博



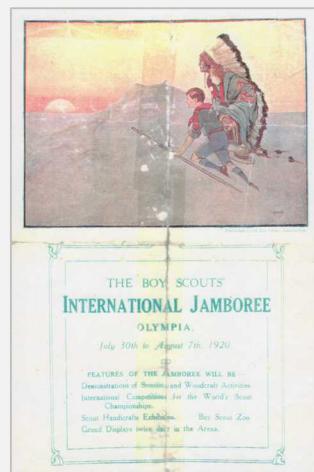
リチャード鈴木少年。
英國への船上で出会い、日本の少年団員として、豊松らと同行した。



ボーイスカウト第一回世界ジャンボリー記念切手と、現地で豊松が作成した絵葉書「1920、ロンドンオリンピア、スカウト感謝祭」



Scouts Thanksgiving Service, Olympia, London, 1920



第一回ジャンボリープログラム

下田豊松のパスポート。訪れる国名と、旅行の目的「少年団国際大会参加の為」が明記されている。



岩内少年団のポストカード

「贈呈 国際少年団員諸氏 大日本帝国岩内少年団」の表書きで作成、世界各国のボーイスカウトに配布した。



旅行記を伝えた新聞記事

豊松は、旅の途上から、日本の新聞社にその様子を寄稿しており、「上海(シャンハイ)の日本人学校を訪問した」「ポートサイド(エジプト)では、ラクダに乗ってピラミッドを見学した」などと、写真入りで伝えている。





安達勇と安達隆世(たかせ)。



後列左より、下田喜久三、安達角次郎、安達克也
前列左より、安達啓治、下田豊松、安達勇。

下田兄弟と安達四兄弟は、古くからの縁があった。写真は勇のデンマーク出発前の記念撮影。

1924 第二回世界ジャンボリー

豊松が英国ロンドンに渡航したその四年後、1924(大正13)年には、第二回ボーイスカウト世界ジャンボリーがデンマークにおいて開催された。この招待状は、当時国際事務局に「Boy Scout of Japan(日本健児団)」として登録されていた、下田豊松の元へ届けられた。

しかし、この時東京では、後藤新平を総裁とした「少年団日本連盟」が結成されており、連盟が中心となって、全国から34人の団員が参加することとなる。豊松は参加しなかつたが、北海道から中村耕平(後の穂別町長)、広田忠雄(後石狩支庁長)、安達勇、安達隆世の4人の若者を豊松が推薦して参加させた。

このうちの安達勇、安達隆世の二人は、岩内の安達牧場、安達農場に繋がる家系の農業青年で、安達家と下田家は古くからの縁があった。

豊松はこの二人を、世界ジャンボリー参加のあと、デンマークに三年ほど留学させて、当時の先端であった「デンマーク式農法」を習得させた。

THG BOY SCOUTS INTERNATIONAL JAMBOREE
will be held at COPENHAGEN in Denmark
from August 10th to 23rd 1924.
Draft-Programme.

August 10th to 17th (Camp Life
(Team Competitions for the World Scout
(Two days hike (Championship
(Displays

August 18th to 23rd (Hospitality
(Entertainments

INVITATION

1. REPRESENTATIVE TROOP.
Get Danske Spejdernes Troops invite EACH COUNTRY to participate with ONE REPRESENTATIVE TROOP of 48 scouts with 4 troop officers. This troop will be considered as a country to compete for the World Scouts Championships. The maximum age of the 48 boys in the official troop not to be more than 48 x 16 years = 768 years on 31/7 1924.

2. CONDITIONS.
The TROOP should bring complete camping outfit (light) and one Two-man Canoe or Two One-man Canoes. If taking part in contest Each troop will have its own camping-ground, where it will make its own camp and prepare own meals in exactly the same manner as an ordinary troop camp.

Provisions for meals will be delivered from Camp-Food Delivery where the troops may order provisions raw as required.

3. PAYMENT.
The payment for food will be not more than 3 shillings (English value) a day per head.

4. VISITING BODIES.
Besides this official representation it is hoped that large parties of Scouts from every country will take part in this, the first International Jamboere held on Danish soil.

Also Packs and Lady Cub-masters will be welcome. They will be camped separately and are invited to give Displays and to march-in parade in a special Cub Tournament.

1924(大正13)年に開催された、第二回ボーイスカウト世界ジャンボリーの招待状。豊松自宅に設置した、日本の事務局「日本健児団」宛てに届いたもの。



「陸と海に道場を造る計畫 丁抹(デンマーク)式農業教育に没頭する少年団の下田豊松」と報じられた、当時の新聞記事。



安達勇の、デンマーク酪農留学の様子。ボーイスカウトとしての交流は、世界共有の価値観から、お互いの信頼関係を築き、多くの実りある学びとなつた。(『くっちゃん酪農の歩み』より)

俱知安岩尾別の酪農開拓

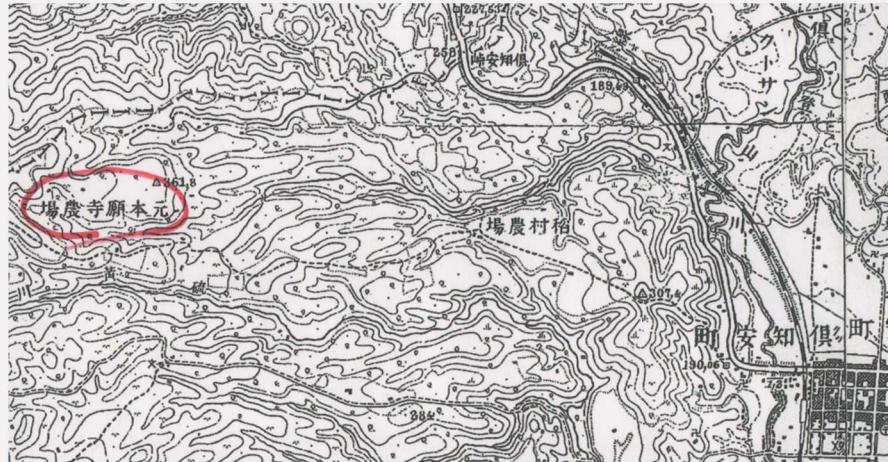
1930(昭和5)年、デンマークより帰郷した安達勇、安達隆世の二青年を入植させるべく、豊松が準備した土地は俱知安岩尾別の「元本願寺農場」と呼ばれる場所であった。

この土地は強い酸性土の不毛の地で、明治時代から入植者があったが、すべて失敗し打ち捨てられていたような、荒れた土地だった。

勇と隆世が実践するデンマーク式農業は、有畜農法といい、酪農を主として家畜の排泄物を牧草地に入れて、循環させる農法であり、デンマークの広大なヒース(荒地)を、肥沃地帯によみがえらせたものであった。

二人の開拓事業のため、種牡牛の導入など、豊松は側面からあらゆる援助をした。努力は年々実りを増やし、やがて不毛の地は、緑豊かな酪農の郷となる。

この地は現在も、牧草地帯として広がっており、地域に大きな恩恵をもたらしている。



1920(大正9)年 地形図「岩内3号」に記載されている「元本願寺農場」。



2023(令和5)年。俱知安岩尾別町菖花園牧場。

1936(昭和11)年 農場開拓十周年の石碑。「健児ノ開拓道場」と名付けられた。豊松が安達二青年の努力を顕彰し建立した。



喜久三 1924(大正13)年。日本アスパラガス(株)起業式

弟、喜久三のアスパラガス事業

1924(大正13)年、下田喜久三博士によって「日本アスパラガス株式会社」が岩内町に設立された。

弟の国産初のアスパラガス栽培事業には、豊松が、俱知安町の敷地に試験農場を準備したり、喜久三のアスパラ研究のための渡欧の時には、費用の援助など、大きな支えとなつた。

また、宮尾舜治元北海道庁長官や土方久徴(ひさあき)日銀総裁など、かつて豊松の少年団運動に携わっていた人脈が、会社設立時の役員に名前を連ねるなど、陰の立役者としての豊松の役割は大きい。

豊松の出会い 理解・協力 対峙した人々



宇都宮太郎中将

陸軍軍人。大正3年より旭川第七師団長。同年岩内にて秋季演習実施の際、在郷軍人会役員の豊松と会い、少年団創設の意思を聞く。中将は英國に駐在していたこともあり、ボーイスカウト運動について詳しく下田に教示、その早期創設を促した。翌大正4年に「旭川少年団」を創設。一年後、豊松の「岩内少年団」が創設される。

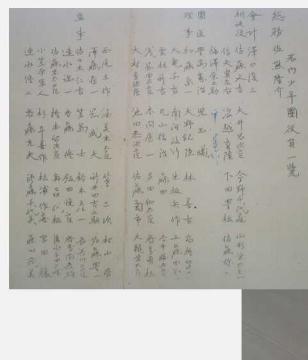


市川外茂治

岩内町役場助役。大正時代初期、岩内町は町費による築港事業(日本初)の失敗により、財政破綻の危機に陥り、その整理の為道府から派遣された助役であった。町政の難中にあり、豊松の「少年団創設」意見に、真っ向から反対意見を述べたが、豊松の強い意志に折れる(当図録の表紙参照)。のち、大正6~8年には第八代岩内町長となり、その頃には豊松の少年団運動に理解を示し、有力な支援者となった。

全岩内町、全国の賛同者

(左)岩内少年団役員名簿。当時の岩内町長をはじめ、実業家、教育者、文化人など六十名の役員が少年団活動を支持。(右)日本健児団賛同署名。英国より帰国した豊松は、少年団の全国組織を作る為、各地へ運動に出向き講演、設立賛同者の署名を集めた。日銀総裁、道府長官などの政財界人から、文化人、軍人など、広範囲に人脉ネットワークを広げている。



小柴 博

1913(大正2)年、小学校訓導であった小柴は、他の訓導仲間とともに「東京少年団」を発足。1920(大正9)年の第一回ボーイスカウト国際ジャンボリーに、豊松と共に参加する。1926(大正15)年、41歳で急逝する。



鈴木慎(リチャード)

スコットランド人の母と日本人の父の混血、日本生まれで、横浜の外国人スカウト「グリフィン隊」所属であった。進学のため英國に渡る「鎌倉丸」船上で、偶然豊松らと出会い、日本代表として国際ジャンボリーに参加することとなる。豊松らは、少年の母、家族とも懇意になり、旅中支援を受けた。



ロバート・ベーデン=パウエル

英國軍人。作家。ボーイスカウト運動創始者。『スカウティング・フォア・ボーイズ (Scouting for Boys)』を著し、青少年の心身育成運動を始め、世界中にその理念が広がった。日本文化にも深く理解を示し、「武士道」の道徳観をスカウト運動に取り入れた。

第一回世界ジャンボリーで豊松らと出会い、日本からの参加を心から喜び、豊松が「ボーイスカウトスピリットを学びにやってきました」と挨拶すると「こちらでは日本の武士道を取り入れているから、そちらが本場ではないか」と、微笑んだという。後に、豊松と書簡を親しく交わしている。

第二次世界大戦の初期、独裁国によって少年団運動が変容していく様を憂いていたが、太平洋戦争勃発の1941(昭和16)年、転居地のケニアで逝去した。

新渡戸 稲造



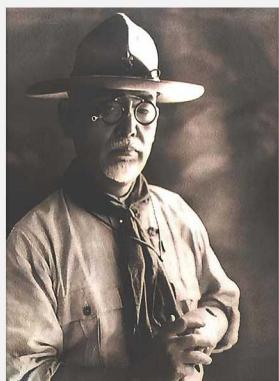
英訳『武士道』著者。1920年発足の国際連盟の事務局次長となり、ロンドンに駐在中、豊松らの訪問を受ける。新渡戸は豊松らを昼食に招き、「日本の教育は立ち遅れている」など、色々助言をした。豊松帰国後は、書簡の往復をしている。

宮尾 俊治



1921~23(大正10~12)年、道庁長官をつとめる。豊松の少年団運動の支持者であり、少年団北海道連盟の初代総裁となる。また北海道のデンマーク式酪農法移入を促進し、喜久三のアスパラガス栽培への支援など、北海道の農業開拓に熱心に取り組み、その発展に大きく貢献した。

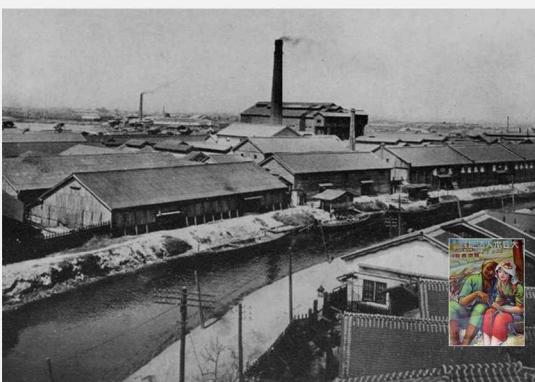
後藤 新平



伯爵。内務、外務大臣。のち第7代東京市長。1922(大正11)年発足した「少年団日本連盟」初代総長となる。豊松が先に考案した「日本健児団」徽章の意匠登録について、新たに発足した「日本連盟」は、権利譲渡の申し入れをしたが、豊松は承諾しなかった。

後藤が政治活動で北海道に来た時にも、列車の中で後藤と会談した豊松は、「政治の倫理化運動、大名行列は御免蒙る」とはねつける。来道のついでのように、少年団の話を持ってくる後藤に、豊松は不誠実を感じたのであろう。

のちに、仲介者のとりなしで、豊松は権利をすべて、無償で連盟に譲渡した。



大日本人造肥料KK

大正後期より昭和にかけて、北海道の農業は冷害や不作に苦しめられていたが、窮状の一つの要因に、化学肥料の値段の高さがあった。当時は最大手の大日本人造肥料(株)が、独占して価格を決定しており、特約店のみの取引であった。豊松は北海道の組合から相談を持ち掛けられ、旧知の別の肥料会社に価格交渉をして、最安の値段で肥料を流通させた。

大手肥料会社は「たかが田舎の一商人が」と妨害工作をして、豊松に刺客まで差し向けたというが、大事にはいたらなかった。

この肥料価格のは正により、北海道の農業基盤は持ち直し、全体の利益も上がり発展することとなった。



三島 通陽

子爵。政治家。作家。少年団日本連盟創設時は、副理事長となる。第4代総長。

1924(大正13)年のデンマークでの世界ジャンボリーの際、三島は豊松の推薦した北海道の四人のうち、二人の安達青年について「履歴上不適切」とし、文部省で試験をすると言いたい。豊松は「ABCの試験なんかボーリスカウト運動には何等問題はない、後藤に聞いてこい」と言い返した。仲介者のとりなしによつて、この二人の青年の参加が決定した。

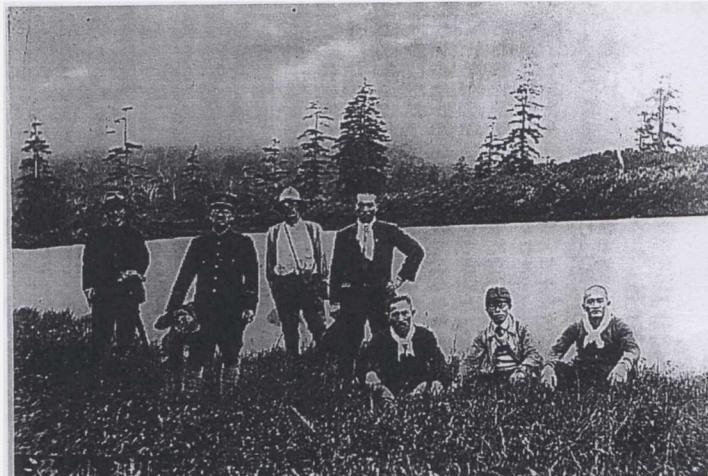
名勝地 「神仙沼」 発見と命名

神仙の住み給う沼

1928(昭和3)年10月7日、ボースカウトのキャンプ地を探索する為、イワオヌプリ山麓から山に入り、長沼へ向かう途中の下田豊松一行八名は、笹薮を越える大難行の末に、これまで地図にも記録がない、名もない沼を発見した。あまりの神秘的な美しい景観に、一同声も出なかったという。豊松はここに「神仙沼」と命名した。

翌年より、この名勝地を世に出すべく、林道開発を各方面にはたらきかけ、昭和4年、大谷地から神仙沼、長沼に至る「神仙沼林道」が開通。同年8月には日本健児団主催の「後志青年団キャンピング」が神仙沼で開催された。このキャンプが新聞各紙に報道され、神仙沼は一躍、観光名所として知られるようになった。

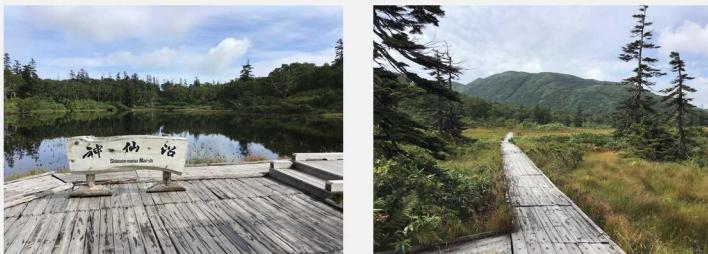
1972(昭和47)年、営林局により「自然休養林」に指定。1979(昭和54)年、遊歩道設置。のち駐車場や休憩所(レストハウス)も設置され、現在は年間十万人以上の観光客が訪れる人気スポットとなっている。



昭和三年。神仙沼。立っている四人の右端が豊松



昭和三十年代の絵はがきに見る神仙沼。遊歩道設置の前。



神仙沼遊步道(2023年10月撮影)

第一回 蝦夷富士登山會　眞人テー

日 時 照和二年八月二日決行

場 所 蝦夷富士（二名後方御山マツカラミツブツ）

登 山 者 貧裕貴族娘ナシ（男女間ハズ）

一級士、男小学生、小校兒童、佐軍人間、青年訓練所生徒、
青年團員、少壯團員、社會工場創立ノ團體參加者等ニ特ニ熱烈ト、

三名名前題ノ場合参加者斯リヌカノ此ヌカニ基合アバベシ

申 込 申込金「三四五錢」

食事 登山杖、紀念繪葉書、山頂飲料（清涼飲料水・バンフレット、
間食、急救藥其他全部ノ用具ニ充ツフ）

1 名士講演 2 步兵隊通信官督 3 飛行機來役 4 傳書ハト
通音 5 謹念撮影

七月二十日迄住所、姓名、年齢ヲ明記申込金ハ添ニ後志山岳
會會費（伊勢安町後志山岳内）申込申込レタント

講 第七師團將校授業

師 北海道山岳會講師交渉中

主 催 日本健兒團

國 際 真人聯盟

後 志 山 岳 會 支 部

施 設 概 要

一、 經 路 里 程 警 見

後 援 官衛新聞社各種團体

■此種獎品一重、蝦夷富士當事務所二重、山頂

第一回蝦夷富士登山会（真人デー）

(俱知安風土館收藏)

蝦夷富士(羊蹄)登山会の企画書

1927(昭和2)年8月、日本健児団主催として企画した、蝦夷富士(羊蹄山)の登山会のパンフレット。しかし他の記録が残っておらず、実際に開催されたかは不明。北大、第七師団、後志山岳会や後志支庁の後援もあり、山頂での記念講演や軍の通信演習、伝書鳩通信など、アイディアマンの豊松は、さまざまに趣向をこらした企画をしている。

主催名の一つに「国際真人連盟」とあるが、豊松は少年団運動と並行して、「国際平和」「誠心」「開拓精神」の理想を掲げる、精神修養の「真人運動」を行い、「たった一人の連盟」として、生涯その生き方を貫く。その成果は、後世に残る公益事業はもちろん、目に見えない功績として、細々ながら次世代へと伝えられていった。

産業誘致 戦時下 そして戦後

「蝦夷富士バター」誕生

大正末、畜産組合より依頼を受け、豊松は簡易バター工場を自家敷地内に開設、製品に「蝦夷富士バター」と命名して売り出す。後に「北海道製酪販売組合(酪連、後の雪印)」工場として稼働、昭和11年まで、土地を無償貸与した。

また、東京の昭和製鉄kk(マンガン鉄製造工場)を俱知安へ誘致し、土地を無償貸与。ほか町道の開発等、数々の公益事業を実らせ、1940(昭和15)年には勲六等瑞宝章を叙勲した。

終戦間際の召集令状 戦後公職追放と引揚者授産事業

1945((昭和20)年1月。58歳の豊松に、召集令状が届いた。3月、豊松は北部第三〇一一七部隊長を任せられ、俱知安町の青年、学徒、生徒を招集、約200名の部隊が、俱知安中学校を兵舎として訓練を行った。しかし、軍服も武器も支給されず、兵の食糧事情も困難な有様だった。

8月15日、部隊は出征することなく終戦を迎える。在郷軍人会分会长の豊松は、公職追放となつた。

終戦の直後、豊松は家族に「これからワシは外地から引き揚げてくる兵たちの援助活動をするから、家の事は一切しない」と宣言し、引揚者の授産事業に力を注ぐ。下田家の所有地に建設途中だった「郷軍兵営」の建物を完成させ、戦後引揚者のための授産施設「佑天舎」として開場、竹細工や洋裁などの作業所とした。施設はのちに「北生社」と名称を改め、昭和三十年代まで、保育所などの俱知安町の福祉施設として有効利用された。

この建物は元々、戦時中、あまりにも粗末なあがら家に住んでいた在郷軍人会長、豊松一家のため、有志が資金を募って住宅を建てようとしたものを、豊松が「作るなら私の家より、みんなで利用できるものを」と、固辞。私物として利用することはなかつたという。

第二次大戦戦時下のボイスカウト運動

日本の少年団運動は、下田豊松の手を離れて「少年団日本連盟」として東京を中心に組織化され、豊松は昭和十年代には、運動から離れている様子だが、当時の詳細な記録は残されていない。

日本の少年団組織は1935(昭和10)年、「財団法人大日本少年団連盟」と名を変え、戦時体制が色濃くなっていく。昭和16年には解散し「大日本青少年團」に統合。日本のボーイスカウト登録は、国際事務局から抹消される。この年、太平洋戦争勃発。同じころ、ボーイスカウトの創始者ベーデン・パウエルが逝去した。

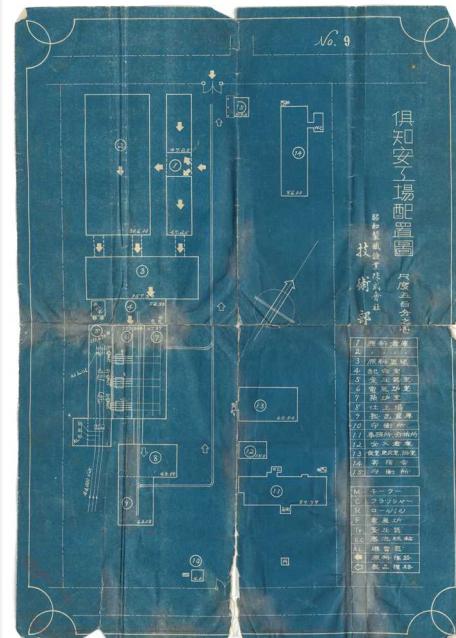
ベーデン・パウエルは、生前、独裁国ドイツ、イタリアのボーイスカウト運動が、国策となり、本来のあるべき運動の姿から、かけ離れていく様子に、失望していたという(『ベーデン・パウエル伝』)。

1920年第一回の世界ジャンボリーで、豊松は世界中の少年団運動の、平和的交流を体験して帰ってきた。第一次世界大戦後の国際連盟設立の頃であり(日本は1933年脱退)、豊松は「宇宙主義者」と自らの行動理念を称し、国境を越えた、理想的な青少年育成運動を実践しようとしていた。

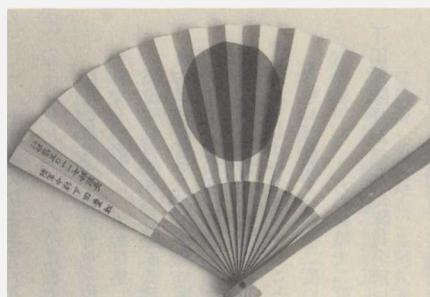
戦時体制下における日本の少年団の姿に、豊松はベーデン・パウエルと同じ失望を感じていたのではないだろうか。



北海道製酪販売組合のバター工場
(俱知安町百年史)



昭和製鉄kk俱知安工場の配置図
(俱知安風土館所蔵)



名入りの扇子
「北部第三〇一一七部隊長」
「陸軍中尉 下田豊松」
(俱知安町百年史)

下田豊松に 光をあてた 一通の手紙

デンマークからの手紙

1955(昭和30)年、戦後新たに発足した「ボイスカウト日本連盟」に、デンマークのスカウト、ハンセン氏から一通の手紙が届いた。「日本のナカムラさん、シモダさん、生きていたら連絡を下さい」といった内容で、1924年、第二回のデンマーク世界ジャンボリーで知り合った、中村耕平と、事務局をしていた下田豊松のことであった。

日本連盟でははじめ、二人を把握できず、北海道新聞に情報掲載を依頼したところ、中村と下田の両人が、健在であることが確認された。この時から、下田豊松の1920年第一回世界ジャンボリー参加の功績が、再び人々の間に知られることとなり、日本連盟から感謝章を授与される。豊松は68歳になっていた。

1971(昭和46)年8月1日付読売新聞、世界ジャンボリー日本初開催の記事。



昭和31年6月3日 (土曜日) (日刊) ⑩

下田さんに感謝賞

日本ボーイ・スカウト生みの親

A black and white portrait of Wang Jingwei, showing him from the chest up, wearing a dark suit and tie.

「真知透君わが國ボーイ・ズカ
町山四郎三郎」下田景松さん(2)

ウトのほか、近田鶴也知安
の「虎子」、日本ガイ・ス
開拓れしといはうだ。

「うーん、スカウトする心
が持てない。ロンドン大会は
結構楽しかった。でも、中止にな
ったときは、ショックでショック。
なんとか頑張った。でも、日本
のガイドカラーワーク隊を
あんな風にやるのです。

1956(昭和31)年8月30日付北海道新聞

日本初の世界ジャンボリー開催

1964(昭和39)年、下田豊松は日本連盟より最高位「先達」の称号を授与される。連盟参与などの役割を担い、北海道内のボーイスカウトジャンボリーなどに参加。晩年になり、再びスカウト制服で活躍することとなる。

1971年、日本で初めて、世界ジャンボリーが富士宮市朝霧高原にて開催。全国紙上に豊松のインタビュー記事が掲載された。

二度目の皇太子殿下奉迎

1974(昭和49)年8月、千歳市において、北海道で初めての日本ジャンボリーが開催され、全国各地の代表ほか、11カ国の外団勢も参加、2万7千人余の大会となった。豊松もこれに参加。この時、当時の皇太子殿下(現上皇陛下)がご来道し、先達下田豊松を謁見された。殿下は、豊松の1920年第一回世界ジャンボリー参加について、ご質問をされ、豊松はそれに答えたという。

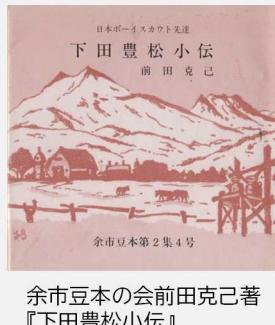
大正時代に豊松は、北海道ジャンボリーを開催の折、皇太子殿下(後の昭和天皇)を奉迎しており、歴代二度目の皇太子拝謁の機会を得ることになった。



1974(昭和49)年8月 豊松(当時87歳)と皇太子殿下(現上皇陛下)



平成10年9月2日付北海タイムス『下田豊松資料室』開館



余市豆本の会前田克己著
『下田豊松小伝』



小町國市著『無名の初代チーフ・スカウト下田豊松物語』

豊松を語り継いだ人々

昭和30年以降、下田豊松の功績を記録しようと、郷土史家、ボーイスカウト史研究者など、さまざま立場の人が著書をあらわし、また豊松自身も、日本連盟の機関紙などに寄稿している。

外部にも身内にも多くを語らず「俺が死んだらわかるんだ」としか言わず、過去の少年団運動の関連資料を、豊松は一つの行李箱にしまい込んでいた。

1982(昭和57)年10月10日、96歳で、激しく駆け抜けた人生を閉じた豊松。息子の下田真氏と恒久氏は、1998(平成10)年、行李箱の資料を公開する「下田豊松資料室」を、俱知安町自宅倉庫の二階に開館した。その中には、1920年の世界ジャンボリー関連、岩内少年団、日本健児団関連などの、貴重な資料が数多く保管されていた。



昭和58年頃下田牧場空撮(井原さん提供)



現在の俱知安西小付近

下田牧場跡地

戦後、豊松の息子、真と恒久兄弟は協力して本格的に農業経営をはじめ、下田牧場を経営して牛を飼い、公共事業にいそしむ豊松にかわって、戦後の一家を支えてきた。昭和60年、酪農を廃業。牧場地を町に譲り、現在は俱知安西小学校の用地となっている。

「確かにオヤジは家庭を顧みなかつたけれど、みんなから下田さん、下田さんと声を掛けられて喜ばれていたんだよ。そしてこのオヤジに対する信頼が、今の私達家族にもつながっているんだよ」(下田真『聞き書き 日本ボーイスカウトの黎明(本間珠美著)』)

企画展 関連開催 イベント



特別シンポジウム 「初代チーフ・スカウト下田豊松の スカウト運動と岩内少年団」

2023(令和5)年9月9日(土)、岩内町郷土館研修室において、シンポジウムが開催されました。豊松が、大正時代から取り組んだスカウト運動が、北海道、日本、世界の歴史にどのように繋がり、影響を与えたのか。北海道各地、全国各地より有識者が集い、豊松の功績を学びました。道外からの参加者もあり、この会の様子は、ネット配信もされました。

シンポジウム講師:(左上)ボーイスカウト旭川第12団、北海道連盟相談役、旭川地区協議会長 森 豊先生。「下田豊松と宇都宮太郎・旭川少年団」(右上)俱知安町教育委員 本間珠美さん。「下田真の語った父・豊松」(左下)千葉大学の孫佳茹さん。「下田豊松と第一回世界ジャンボリー」(右下)スカウティング研究センターの中島豊先生「下田豊松のスカウト運動における足跡と意義」



神仙沼散策。



俱知安町営花園牧場は牛の群れが見られました！

郷土館秋のバスツアー 「神仙沼散策と豊松ゆかりの地をめぐる」

2023(令和5)年10月4日(水)、豊松の発見した共和町神仙沼の散策、そして俱知安町の豊松ゆかりの地を訪ねるバスツアーを開催。18名の参加者がありました。

当日は最高のお天気で、一時間あまりのトレッキングの足取りも軽やか。ニセコ高橋牧場に寄り道し、俱知安町下田牧場跡や、昭和初期岩尾別の安達勇、隆世の入植地をめぐり、下田豊松の功績を学びました。



俱知安風土館を見学。

年表 下田豊松と岩内少年団

年	下田豊松と少年団史	備考
1887 (明治 20)	○11月7日 豊松、岩内郡御鉢内町にて出生。父仁三郎、母スズ長男。	
1902 (明治 35)	○岩内尋常高等小学校卒業。	
1907 (明治 40)	○函館商業学校卒業。歩兵第二十七連隊（旭川）入営。○翌年除隊、岩内下田商店の経営に専念。	
1912 (明治 45/大正 1)	○豊松、陸軍歩兵少尉に任官。奥野シズと結婚。	
1914 (大正 3)	○在郷軍人岩内分会長。○第七師団演習が岩内町にて開催。師団長宇都宮太郎中将より、少年団の創設を促される。	○「大日本少年団」発足
1915 (大正 4)	○東京少年団で活動する小柴博の知遇を得る。	○「旭川少年団」設立。
1916 (大正 5)	○6月28日「岩内少年団」設立。男子学校の生徒500名が団員となる。団長下田豊松。	
1917 (大正 6)	○豊松、俱知安町へ移住。下田俱知安支店として米穀雑貿商、肥料試験場、運送業他を経営。	
1918 (大正 7)	○陸軍中尉に昇進。○翌年郷軍人会後志連合分会長となる。	
1920 (大正 9)	○東京新聞で「第一回国際ジャンボリー」英國開催を知り参加を決意。○5月18日横浜港を出航。神戸港より出国。7月25日より、ロンドンにて、ボーイスカウト第一回国際会議、国際ジャンボリー開催。○世界各国を経由しながら、10月18日帰國。	
1921 (大正 10)	○徽章、団規則等を制定し、日本健児団創設書を作成。○国際登録のため、賛同者署名を全国、各界の著名人より集める。○「Boy Scouts of Japan (日本健児團)」の名称で国際登録。自宅に国際事務所設置。○「日本健児團」設立趣旨、要綱を天皇陛下に奉呈。○皇太子殿下（昭和天皇）渡欧し英國のB・P卿と会見される。この時豊松祝電を差し、折り返しB・P卿より謝状を受ける。	○宮尾舜治、北海道庁長官に就任。 ○2月下田喜久三「瑞洋食品研究所」創設。肥料製造、缶詰加工。
1922 (大正 11)	○全国少年団大会静岡で開催。後藤新平を総裁とし「少年団日本連盟」結成。豊松は評議員。豊松考案の徽章と標語を連盟で使用。○英國皇太子来日奉迎式を開催。北海道代表として参加する。○札幌第25連隊において「日本健児團北海道ジャンボリー」開催。皇太子殿下（昭和天皇）を奉迎、全道500名余の少年団員参加。	
1923 (大正 12)	○北海道少年団連盟結成。宮尾長官が総裁に就任。○第一回少年団海拓デー。軍艦「春日」に乗艦見学。	○4月下田喜久三渡欧。
1924 (大正 13)	○第二回少年団海拓デー、少年団800名軍艦「日進」に乗艦見学。○「海拓健児團（のちシースカウト）」創設。岩内港にて発団式。○第二回世界ジャンボリーがデンマークで開催。日本からは37名参加。北海道から参加した安達勇、安達隆世の二人はその後デンマークの農場に残り、先進的な酪農を習得する。○後志産牛馬畜産組合が簡易バター工場開設、豊松は自身の土地建物を無償提供して工場とした。「蝦夷富士バター」誕生、豊松命名。	○日本アスピラガス（株）創立。 ○後志支庁長の計らいで喜茂別村にある道有林の特別払い下げを受け、造材利益が喜久三渡航費にあてられる。
1925 (大正 14)	○後志少年団連盟発足。後志健児團キャンプを俱知安町で開催。○在郷軍人会後志連合分会長就任。 ○北海道信用購買販売組合連合会の依頼により、農家の窮状の要因であった、高価な肥料の価格引き下げに奔走。大手特約店の独占を断ち、安価な肥料の流通を実現、北海道農業の飛躍に貢献した。	
1926 (大正 15/昭和 1)	○豊松の国際登録した「日本健児團」を改め、「少年団日本連盟」が国際事務局に正式再登録される。	○6月小柴博逝去、41歳。
1927 (昭和 2)	○「健児の園開拓道場」を開設。デンマークより帰郷の安達勇、安達隆世が本格的な酪農開拓を開始。	
1928 (昭和 3)	○ニセコヘスキーに来た秩父宮殿下の為、健児団長として接待役奉仕。○「神仙沼」発見、命名する。	
1929 (昭和 4)	○日本健児團主催後志青年団キャンピングを開催。	○下田農場から株苗を提供したアスピラが喜茂別で初出荷。
1930 (昭和 5)	○安達2青年の酪農農場のため、種牡牛の導入など側面からの惜しみない援助を続ける。 ○俱知安下田農園でイチゴ摘み体験会を開催。北海道初の「観光農園」として人気を博した。	
1934 (昭和 9)	○安達隆世逝去。○福島会津若松の飯盛山（白虎隊自刃地）へ国旗掲揚塔を寄贈。	
1935 (昭和 10)	○「財団法人大日本少年団連盟」発足。	
1936 (昭和 11)	○安達勇らの「開拓道場」、酪農製品の生産著しく新工場設立。○「開拓道場」十周年記念碑建立。	○二・二六事件で総長齊藤実暗殺。
1940 (昭和 15)	○叙勲、勲六等瑞宝章 ○昭和製鉄KK（マンガン鉄製造工場）を誘致。土地を無償貸与する。	
1941 (昭和 16)	○大日本少年団連盟は大日本青少年團に統合。日本のボーイスカウト運動史途絶える。	○大東亜戦争勃発。○B-P逝去。
1943 (昭和 18)	○鐘淵実業KK（砂鉄製鍊工場）を誘致。	
1945 (昭和 20)	○1月召集令状（豊松58歳）。3月北部第三〇一一七部隊長を命じられる。○8月15日終戦。公職追放。	
1946 (昭和 21)	○「北生社後志授産場」開場。戦地引揚者の授産事業を始める。	
1947 (昭和 22)	○三男真、四男恒久が農業をはじめめる。○戦後の新たなボーイスカウト日本連盟が発足。	
1950 (昭和 25)	○ボーイスカウト日本連盟が国際事務局に復帰する。北海道連盟も新たに発足。	
1954 (昭和 29)	○デンマークのハンセン氏より一通の手紙。戦前の豊松の功績が再評価されることとなった。	○9月26日岩内大火
1955 (昭和 30)	○北海道連盟発行『PIONEER No.14』に豊松著『1920年第一回国際ジャンボリー参加』が掲載される。 ○中村知が『北海道の旅日記より』著す。豊松の話を聞き書き。	
1956 (昭和 31)	○日本連盟「感謝章」受章。○豊松、『スカウティングNo.41』に「第一回国際ジャンボリーの思い出」掲載。	
1962 (昭和 37)	○藍綬褒章受章 ○日本連盟「鷹章」を授章。	
1963 (昭和 38)	○日本連盟「有功章」受章。	
1964 (昭和 39)	○日本連盟より「先達」の称号を授与される。	
1966 (昭和 41)	○俱知安町特別功労賞受賞。	
1970 (昭和 45)	○『羽ばたけ北海道 北海道回想録2』（北海道行政資料課刊行）に、豊松の回想録が収録される。	
1972 (昭和 47)	○日本連盟五十年記念表彰を授章。○第11回ボーイスカウト北海道大会、小平町開催。大会顧問に就任。	○札幌オリンピック開催
1974 (昭和 49)	○第6回日本ジャンボリー千歳市にて開催。皇太子殿下（現上皇陛下）を奉迎。「先達」下田豊松（当時87歳）にお言葉をかけられ、1920年の第一回国際ジャンボリー参加についてご下問があった。	
1979 (昭和 54)	○4月 安達勇逝去。	
1982 (昭和 57)	○10月10日 下田豊松逝去。96歳。	
1985 (昭和 60)	○俱知安下田家、農業を廃業。農場は現在の俱知安西小学校用地となる。	
1992 (平成 4)	○余市豆本の会前田克己氏により、『日本ボーイスカウト先達 下田豊松小伝』が刊行される。	
1997 (平成 9)	○小町國市『無名の初代チーフスカウト下田豊松物語』を著す。	
1998 (平成 10)	○豊松三男下田真氏、四男恒久氏らにより俱知安町自宅に「下田豊松資料室」を開設。	
2001 (平成 13)	○本間珠美氏、下田真氏への聞き書き『日本ボーイスカウトの黎明—父下田豊松の記憶—』著す。	
2011 (平成 23)	○6月 下田真氏逝去。下田豊松資料室、閉館。○北海道連盟60年記念誌『PIONEER 特集号原点回帰先哲に学ぶ』刊行。	
2022 (令和 4)	○ボーイスカウト日本連盟創立100周年。	

令和5年(2023)11月7日作成 ○参考資料：ボーイスカウト北海道連盟創立60周年記念誌『PIONEER 特集号』、『スカウティング研究 第22号(スカウティング研究センター)』、『岩内史年譜(第6版)』、『岩内町史』、『俱知安町百年史』、『余滴2(佐藤彌十郎著)』、『くっちゃん酪農の歩み(俱知安町酪農組合)』、『日本ボーイスカウト連盟100年史(上) (ボーイスカウト日本連盟)』



この度の企画展開催に際しご協力を頂いた皆様に
心より感謝御礼申し上げます(敬称略)

俱知安風土館 本間 珠美(俱知安町教育委員)
佐藤 英行 孫佳茹(千葉大学)
井原 由加子 森 豊(ボーイスカウト旭川第12団、北海道連盟相談役、旭川地区協議会長)

中島 豊(スカウティング研究センター) 黒澤 岳博 (スカウティング研究センター)

2023(令和5)年度岩内町郷土館
第三回企画展
ボーイスカウト日本連盟設立100周年+1
岩内少年団下田豊松の功績

2023年11月30日発行

編集/発行 岩内町郷土館(ぱとりあ岩内)
岩内町清住5-3
TEL 0135(62)8020